編集後記

編集委員長　樋口　利彦

多くの学会誌は複数名による査読方式を採用している。本学会誌「環境教育」も、原著論文、総説、研究報告へ投稿される論文は、複数の査読者による審査が行われ、その審査結果を通過した研究レポートのみが掲載可能となる。上記の区分の論文は、査読者や編集委員会によって、様々な視点（独創性、正確性、理論的緻密さなど）から審査される。

投稿者は自らの論文には独創性があり正確であると思っているからこそ、原著論文など審査が課せられる区分に投稿する。しかし、査読者や編集委員会によって細かくチェックされ、原著論文、総説、研究報告の掲載に値するかどうかが判断され、そして書き直しを要求されることは多い。

投稿者が自分では完璧な論文であると思っていても、大なり小なりのミスが存在する。そうしたミスを残したまま公にすることを編集委員会は避けたい。査読システムはそれを保障してくれるのである。論文の内容や文章を他の研究者からチェックしてもらうのは、むしろありがたいと思う。根拠のない論理展開、間違った分析方法、誤解をうける文章表現、こうしたミスは誰にでも経験がある。投稿者本人は論文に対する思い込みが強いためミスをなかなか発見できないでいるが、査読によってそれが見えてくる。査読はそうした論文の問題点を指摘し、論文の質を高める役割を有している。もちろん、査読者や編集委員会が勘違いしている場合もあるわけで、そのときは反論することが大切である。

大幅な書き直しが要求された査読結果をみると挫けそうになることがあるかもしれないが、そこで挫折することなく論文の質を高める努力を怠らないことである。そこで挫けてしまうと論文として日の目を見ないことになり、環境教育に関する貴重な資料が埋もれることとなる。指摘された問題点は、その後の修正に活かされ、質の高い論文に仕上がっていくと考えてもらいたい。

最後に、投稿前にいくつか初歩的な注意を喚起しておきたい。

1．十分な研究経験のある人と論文の内容を討議すること。また、そうした人に文書の校閲をしてもらうこと。
2．論文の章立て、引用の仕方、引用文献の書き方など本誌のスタイルを理解するために、本誌の最新号を見ること。

本誌は査読が課せられない投稿区分（評論、資料、書評、会員からの手紙）も準備している。これら区分への投稿も大歓迎である。